

越前国の敦賀の地名

今回は、ドラマ「光る君へ」に因んで、紫式部の父・藤原為時が国守となった越前国、その入り口の塩津山(近江国北端)と角鹿の津(敦賀港)について、及び、この地を詠んだ歌についての講義でした。(梅花万葉集友の会・113回・講義)

今回、興味を持ったことは、

敦賀港が古代からの良港であり、朝鮮半島や大陸から船でやって来る人がかなりいたことでした。(ドラマでは、宋人(10世紀、中国・北宋から)が来ている)

瀬戸内海を通る方が来やすいのだが、大和王権の守りが堅くて通航し難いから日本海側を来る。しかし、石見の海には良い浦がなく(人麻呂の歌131番にも)、出雲は入港が厳しいから、監視がぬるい敦賀へ来るのだ、とのこと。

もう一つ、興味を持って、推察して見たことです。

「敦賀」の地名の由来が、古事記と日本書紀とで異なることです。

古事記では、神功皇后記にあり「この地の神からの贈り物・イルカ、その鼻の血から
「血浦ちぬら」と言う」(レジュメ・6ページに)

日本書紀では、この4代も前の、垂仁天皇記にあり、およそ次のように記します。

「崇神天皇の御世に、額に角の生えた人が、舟にのって越の国の筍飯けひの浦に着いた。それでそこを「角鹿つのが」という。その人は、加羅国(新羅国の南に。4世紀～5世紀頃)の王子・ツヌガアラシトと言う」

(翌年の記事に、新羅の王子・アメノヒボコが来た話。(3ページに))

時代も、由来の中身も、異なっています。

「日本書紀・垂仁記」の話は、角鹿国造家(敦賀郡の国造、後に郡司兼気比神社の禰宜)に伝わる話を、この地にルーツを持つ中央官僚が記したと思われる、

“此処は、古くから栄えた地で、大和国にも通じる地。だからこそ、外国人がわざわざ此の港にやって来たのです。それ以来、ずっと昔から「角鹿の津」と呼んでいます。” と言いたかったのだ、と思います。

更に、「日本書紀」は、「応神天皇記」に、皇太子の時にこの地の筍飯の大神に参拝されたことは記しているのですが、「古事記・神功皇后記」が語るような「地名の由来“血浦”」の話しについては、“記録がなくつまびらかでない”と、わざわざ否定するようなことを書いています。

一方、「古事記・神功皇后記」は、

“訪れた土地の神と直ぐに仲良くなり、名前を交換しようと言いつたり、翌朝には、その血で浜が赤く染まる程の大量のイルカを、贈り物として貰った。”と語る。つまり、

“神功皇后の子である応神天皇は、皇太子の時から、既にこのような尋常では無い神性を持っておられた”と言いたかったのだと思います。

(「敦賀」の地名の由来は、ちょっと付け足しただけ、とも見えます。)

以上に見て来たような、両者の「説明・主張」の相違については、
「古事記」は、天皇たちが語った天皇家の歴史
「日本書紀」は、貴族官僚が記した日本国家の歴史 と言えることから、
両者間の「歴史上の出来事に対する見方、志向」の違い、それが表れていると感じました。

太田蓉子 記 (2024.6.)

付記

敦賀の地形

敦賀湾は、リアス式海岸である若狭湾の一部、その東端に位置する。

敦賀は若狭国との往来が容易で、結びつきが深い。

敦賀湾は、岸辺から海に入ると急激に水深が下がる地形で、大型船も岸辺近くまで寄ることができる天然の良港。

敦賀平野は、周囲三方を山に囲まれた扇状地である。従い、越前国府のある武生へは、峠を越える必要があり、それを避けるために敦賀湾の海岸沿いを舟で北東へ向かい、その後、陸路をとることもある。(笠金村の歌・366,367番、手結が浦に行く)

敦賀湾の全貌

角鹿の津・浦

手結が浦(東側の小さい浦)

